

レクリエーションを活用した離床ケア

風船バレーによる介入を通して

石川県 医療法人社団浅ノ川桜ヶ丘病院

○宮野春菜 橋本 太 櫻井美希

Summary

1. 目的 臥床傾向患者や日中活動意欲の低下した患者に対する離床を促す関わりの効果を明らかにする。

2. 内容 レクリエーションを用いた介入研究。研究対象者は当病棟入院患者2名。仮にA氏、B氏とする。週に2、3回デイルーム中央にて、昼食前に10分程度風船バレーレクリエーションを行う。レクリエーション自体は病棟内全患者自由参加とし、1回に5～10名で実施する。レクリエーションによる介入前後にPositive and Negative Syndrome Scale (以後PANSS)にて陰性症状を評価、比較する。2ヶ月間レクリエーションを続け、対象患者の活動意欲や日常生活動作(以後ADL)の変化について観察を行う。

3. 結果 事例紹介。A氏、60歳代、女性、統合失調症、障害高齢者の日常生活自立度B-1。作業療法(以後OT)やレクリエーションへの参加は消極的。ADLは食事半介助、車椅子からの移乗は見守り・支えにより可能。尿道カテーテル留置し、オムツ使用。B氏、70歳代、男性、統合失調症、日常生活自立度B-1。OTやレクリエーションへは促しにより時々参加。日課がないときは臥床傾向。脳梗塞の既往あり右片麻痺みられる。ADLについては、食事は自力、車椅子からの移乗は見守りで可能。車椅子を自走する自主訓練を毎日行っている。

事例1、A氏。レクリエーションによる介入実施前のPANSSの陰性症状の評価は49点中20点、介入後は18点とやや陰性症状が軽快。面接時に「OTに参加したい」と活動に対し前向きな発言あり。ADLに関しては、手足の痺れが増強し食事は全介助となり、全体的にレベルは低下した。

事例2、B氏。レクリエーション介入前のPANSSの陰性症状の評価は49点中15点、介入後は11点と大幅に陰性症状が軽快。OTやレクリエーションへの参加は継続し、離床時間は増大した。食事と移乗はほぼ自立した。

4. 考察 A氏は、陰性症状の重症度はやや下がったがADLは低下し、レクリエーションによる明らかな離床効果は見られなかった。手足の痺れの増強に伴いスタッフに依存的になり、セルフケアを行う意欲低下が要因の一つと考える。ただ、以前から全く興味を示さなかったOTに対する意欲的発言が見られ、活動へ参加していくきっかけになったと考える。B氏においては、陰性症状重症度が大きく下がり、ADLレベル向上した結果から離床効果があると推察された。ただ、レクリエーションの他、OTや自主訓練の影響も加味せねばならず、レクリエーションのみの効果は明らかにならなかった。病棟全体の患者においては、10数名が継続的に参加し、他患や周りへの関心を持つきっかけになったと考える。

5. 今後の課題

今回は2人の患者に焦点を当てたが、今後はより多くのデータを比較し、レクリエーションの効果を明確にすることが必要と考える。

倫理的配慮

対象者に研究の趣旨と研究への参加・不参加は自由であること、研究の成果は発表されるが個人を特定できるような情報は公開しないことを説明し同意を得た。また、桜ヶ丘病院委員会に研究の趣旨やプライバシーへの配慮を行うことを説明し研究実施の承認を得た。

本論文について発表者らに開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

Key Words 陰性症状 離床

精神科病棟職員のストレスの実態を知る

Japanese MBI-GS を用いて

石川県支部 医療法人社団浅ノ川 桜ヶ丘病院

○西村和美 高橋由美子

Summary

【目的】

当院精神科のストレスの実態を把握する。また、ストレスの実態が性別、年齢、職種間で違いがあるのか比較する。

【内容】

1. 研究期間 2016年7月11日～7月25日
2. 調査対象 精神科病棟(3、4、5、6病棟)看護師、看護補助者
3. 研究方法 MBI-GSによるアンケート調査 16項目あり3つの尺度:疲弊感(5項目)、シニシズム(5項目)、職務効力感(6項目)を持つ。回答は、各質問に対して「全くない」の0から「毎日(いつも)」の6までの7段階の頻度次元で求める。各下位尺度の合計点を質問項目で割った値が下位尺度得点となる。疲弊感とシニシズムは、点数が高いほどバーンアウトの程度が高く、職務効力感は点数が低いほどバーンアウトの程度が高いと解釈される。
4. 倫理的配慮 研究の趣旨、目的を書面に記載し同意が得られた対象者に調査を行った。(当院研究委員の意向により同意書に署名がないものを無効とした)データは研究者以外が閲覧できないように管理、研究終了後は、速やかにデータを破棄した。また調査実施にあたっては倫理委員会の承認を得た。

【結果】

95名にアンケート配付。80名回収84.2%回収率。有効回答(未回答、署名が無かった為)61名。

【考察】

当院では、総じて女性、50～60歳代でストレスを抱えている結果となった。患者を幸せな方向へ導くためには、スタッフの元気は大きな推進力となるはずだが、社会経験豊かな女性スタッフほどバーンアウトに陥りやすい。本研究の対象者の65%が女性であることから女性スタッフの十分な力が発揮されておらず残念な結果であると言える。

【今後の課題】

対象病棟を広げ、属性を増やし細分化ストレスの現状を明らかにする。またスタッフが元気で働ける職場作りが今後の課題であると考えた。

「本論文について発表者らに開示すべき利益相反関係にある企業などはない」

Key Words

バーンアウト 精神科病棟 ストレス

感情労働を必要とする病院職員に対して

アンガーマネジメントの導入を試みて

石川県支部 医療法人社団 浅ノ川 桜ヶ丘病院

○吉浦敏則 袋井修平

Summary

【目的】

A病院におけるアンガーマネジメントの効果を明らかにする。

【研究方法】

1. 期間：H28年8月～9月(9月1日研修)
2. 対象：病院職員で同意を得られた32名
3. 方法：アンガーマネジメント研修(アンガーマネジメント体験クラス60分を協会公認FTが実施。
①「6秒」衝動②「三重丸」思考③「分かれ道」行動の段階別に感情の仕組みについてグループワーク等を取り入れ研修を実施)の前後に感情労働尺度(21項目)アンケートを実施。

【結果】

アンガーマネジメント研修後、ウィルコクソン検定では全体として(各項目Ⅰ～Ⅳ全て)「有意差あり」という結果であった。各項目別では年齢別・年齢20～40歳、勤務年数10年以上、職種別では看護師に変化がみられた。

具体策「6秒」衝動「三重丸」思考「分かれ道」行動では実施後の感想で「どの部分をどう自分に当てはめていくかが難しい」等があった。

【考察】

全体(Ⅰ患者へのネガティブな感情表出、Ⅱ患者への共感・ポジティブな感情表出、Ⅲ感情の不協和、Ⅳ感情への敏感さ、以後数字で表記)として変化がみられた。短期間でも一部変化がみられた。今後もこの技術を継続して学習していくことで、感情労働において現れるストレスへの適応やとらえ方が、更に変化していくものとする。

具体策については、感情の仕組みを理解できたことや、売り言葉に買い言葉では建設的な関係が築けないこと、怒りの感情の発生機序から衝動→思考→行動のコントロールへつながることもあり、その初期段階の衝動のコントロールが最も支持が高かったものとする。

【今後の課題】

感情労働の現場では、様々なストレスと向き合いながら日々職務を遂行していく必要がある。イライラする感情を溜め込み我慢するのではなく、自分の感情に責任をもって行動できるように、知識を技術として定着していけるような継続した介入が望まれる。

※本論文について発表者らに開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

Key Words アンガーマネジメント 感情労働 ストレス